

平成 26 年度
HIGO プログラム選抜試験問題

2014

HIGO program selective examination for Kumamoto University

小論文

試験時間 1 時間 30 分
(10 : 00 ~ 11 : 30)

Short Article

Duration of examination 90 min
(10 : 00 ~ 11 : 30)

注意事項 Attention

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子は開かないこと。
Do not open this booklet without the examiner's permission.
2. 問題用紙、解答用紙に乱丁等がないか確認すること。
Please check to ensure all pages are present in the correct order.
3. 試験問題は 2 題あります。どちらか 1 題を選択し解答すること。
Select any two questions to be answered among the questions , and .
4. 解答用紙をとじているホッチキスは、はずさないこと。
Do not remove the staple from the answer sheets.

□ 以下の文章を読んで後の問いに答えなさい。

Bさんは66歳の女性、発作後呼吸困難に陥り、老人ホームから病院に搬送された。それまでの8年間の病歴には、反応性気道疾患、度重なるICU収容と挿管に起因する慢性閉塞性肺疾患、さらには発作性疾患に痴呆まで名を連ねていた。今回の入院に先立つことおよそ3か月間は、彼女は歩くことも話すこともできない状態であった。その間彼女は3回入院したが、体の機能は悪くなるばかりであった。今回の入院では、彼女の娘が代理人として、治療のための永続的代理人の力を行使し、母親が話せたならばきっとそうしてほしいと思っただからと、蘇生措置拒否(DNR)命令を出した。

救急部でのコンサルで、内科のインターンがBさんの娘にDNRのステータスを確認してもらった。母親の厳しい状態の説明を受けると、娘はインターンに「できるだけのことをしてください。必要なら挿管してもよいので、とにかく母を死なせないでください」と話した。Bさんは挿管で呼吸を確保され、人工呼吸器を付けられた。重度の慢性閉塞性肺疾患の悪化と診断され、ICUに収容されて治療を受けた。

3日後、患者に回復の兆しは全くなかったため、娘は管を外して母親を死なせてくれと頼んだ。医療チームでしばらく議論がなされた後、彼女の管は外された。最初のうちはマスクを通じて供給される酸素で小康状態を保っていたが、およそ10時間後、彼女の状態は悪化し、激しい呼吸困難の兆候を示した。

当直のインターンは、BさんはDNRであり、「再挿管はしないように」と言われた。人工呼吸器を用いずに最善の努力を試みた後、インターンはICUのスタッフに、Bさんの状態は悪化し、死は近いかもしれないと家族に伝えるよう頼んだ。酸素補給、ベンゾジアゼピン系抗不安薬、鎮痛剤モルヒネにより、Bさんは苦痛を感じない状態を維持していた。

1週間病床の母親に付き添い、母親の息遣いを見守り続けた娘は、医療チームをそばに呼び、「母を生かしているものは何でしょうか。」と尋ねた。一連の話し合いの後、娘は医療チームに、食事と抗生物質の投与をやめ、酸素だけにしてほしいと頼んだ。さらに1週間が過ぎた。Bさんが40パーセントの酸素マスクで生命を維持していた3週間目も終わりに近づいた時、娘はチームにこう尋ねた、「酸素を止めることはできますか。」

(*The Hastings Center Report*, vol.33, no.2, 2003 より)

問1：酸素を止めるという患者の娘の要求が理にかなっているとすれば、その理由は何か。

(400字以内)

問2：酸素を止めるという患者の娘の要求が理にかなっていないとすれば、その理由は何か。

(400字以内)

問3：自分がその医療チームに属しているとすれば、娘の要求にどう対応するか。

(400字以内)

□ 次の記事を読み、現代日本における政治権力の行使について、解答用紙2枚以内で自分の考えを論じなさい。

朝日新聞（2014年3月28日）記事（抄）

（特定秘密法から考える）権力と社会、市民の力信じられますか

長谷部・杉田両教授対談

NHK会長の言動で揺らぐ公共放送の信頼性。権力による介入や排外主義的な主張で社会が揺さぶられるなか、私たち市民は自信を取り戻せるのか。長谷部恭男・東京大教授（憲法）と杉田敦・法政大教授（政治理論）による連続対談は今回、NHKをめぐる一連の問題を入り口に、幅広く語り合ってもらった。

長谷部「内閣の極端人事、法の想定外」 杉田「前面に出る国家、支持集める」

杉田敦・法政大教授 会長や経営委員の人事が発端となり、NHKが揺れています。公共放送への影響力を強めようという、安倍内閣中枢の意図を隠さない露骨な人事ですが、放送法にはのっとっています。

長谷部さんは、特定秘密保護法の条文があいまいで悪用される恐れがあるという指摘に対し、「法律とはあまいなもので、常識に基づいて運用される」と反論されてきました。しかし今回の一件は、法律が常識ではなく非常識によって運用され、そうなるとなかなか止める手立てがないことを示していませんか。

長谷部恭男・東京大教授 日本の法制は内閣がイデオロギー的に極端な人事を行うことを想定していません。内閣が本気になれば「独裁」に近い状態もつくれないことはない。例えば最高裁の裁判官の人事は、最高裁側が推薦した候補から内閣が指名するのが慣例で、憲法には「内閣でこれを任命する」と規定されているだけです。慣例なんか関係ない、という内閣が出てくれば止められません。

杉田 法律による規制には限界があり、最後は慣習的なものに依拠せざるを得ないということですね。

長谷部 そうです。そしてそうした慣習は、ある種の保守主義によって支えられてきました。「長年にわたって試練に耐えた原則の方が、試練を経たことのない新しい原則よりも尊重に値する」。これはリンカーンの言葉だとされていますが、新しいことをやろうと従来のやり方を壊したりひっかき回したりするよりも、長年使われてきたやり方を大事にする方が結局は世の中の役に立つのだと。こういう考え方は、かつての自民党には広く共有されていたと思います。

杉田 つまり、安倍内閣は保守ではないと。

長谷部 保守ではないと思います。何も守っていないんじゃないか。ちなみに、保守の反対概念はリベラルではありません。おっちょこちょい、とでも言うべきものです。壊れてもいけないものを直したり作り替えたりしたがる。「壊れてもいけないものを直そうとするな」。これが保守主義の基本です。

杉田 しかし安倍内閣が支持されている理由のひとつは、「私たちに直せ」と言い、直そうとしてみせているからではないか。為替をいじり、武器輸出三原則を見直す。「時代錯誤だ」という批判が出ますが、安倍内閣の支持者にしてみれば、そんなこと言っていたらグローバル化にのみ込まれていだけじゃないか、政治は手をこまねいているつもりなのかと。

私自身は、政治への過度の期待は危険だと思っています。企業の海外流出などに対して政治にできることは極めて限定的ですから。だがそれでは多くの人は納得しない。国家が前面に出れば経済も社会も良くなるはずだと考え、わらにもすすがる思いで安倍内閣を支持していると感じます。